



ヨウ エンクン
楊 婉君さん (中国)

『日本の不思議』



あっという間に、日本に来て一年が経ちました。

私が日本に初めて来たとき、かなりびっくりしたことの1つは、日本の児童たちが親の同伴もなく交通機関などを使って通学していることです。そういった子供たちは皆同じ帽子やヘルメットを被ってランドセルを背負ってグループで通学しています。ときどき、1人で電車に乗って通学している子供をみかけることもあります。このような光景は、故郷の武漢に住んでいたときは一度も見かけたことがなかったので、ほんとうにびっくりしました。

私の故郷の武漢では、どの子供も親に付き添われて登校するんです。

それから、日本の小学生や中学生が登校、下校する時通学路のあちこちに、おそろいのジャンパーや腕章をした大人が出ています。親の世代からおじいさんおばあさんの世代まで幅広い大人が、歩いている子供たちに挨拶したり、横断歩道で黄色い旗をあげて車を止めたりしています。それは通学路で子供を見守るボランティアだと聞きました。

つまり、日本の親は、自分の子供を守るだけでなく、地域の子供全体を守るために、地域で働きます。それにより、日本の安全管理が一步一步完全なものになっていくのではないのでしょうか。また、通学中の安全を確保するために集団登下校を実施する小学校が多いそうです。通学路において、子供が一人きりにならずに済むので、誘拐などの事件を防止することができます。また、いろいろな学年の集団をつくることで、集団行動を身に付けるといういい点もあります。それによって、社会に適応した自立した大人になることができると考えられます。

では、中国ではどうでしょうか？

中国の場合には、通学路の安全ということが気になるために、親や祖父母が送り迎えざるを得ないということがあります。中国では、一年間に40万人の子供が行方不明になっているといえますし、実際、子供が突然いなくなるということは時々あって、私の近所の女の子も突然いなくなりました。しかし、中国式の送り迎えが、子供を甘やかすことで自立を遅らせ、また、社会的に見れば渋滞などによる交通問題を引き起こすこともあります。

確かに、子供の送り迎えにとどまらず、子育てや子供の教育において、子供の自主性を尊敬するということと安全性の確保との間でバランスを取ることはとても難しいです。

現在、中国では、居住地と学校の距離を短くするような改革が始まっていて、今後は状況が変化する可能性があると思います。

日本へ来て、びっくりしたことはいろいろあります。でも、これは日本へ来たからこそその経験です。こんな小さなことでも、私の視野を広げると実感しています。やっぱり日本へ来てよかったなぁと思っています。

以上、ご静聴ありがとうございます。